

源流の四季

第14号(2004年7月) 夏



Summer

発行所/多摩川源流研究所 〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村4383
TEL 0428 (87) 7055 FAX 0428 (87) 7057

発行責任者/中村文明

協力/多摩川源流協議会(塩山市・奥多摩町・丹波山村・小菅村)
多摩川源流観察会

印刷/(株)サンニチ印刷

<http://www.tamagawagenryu.net>
E-mail:genryu@mx.cosmo.ne.jp



深緑の三条谷(丹波山村 撮影 中村文明)

Contents 目次

せせらぎ館が来館者10万人達成.....2

「森林再生プロジェクト」スタート.....3

源流探訪の旅好評.....4

宮内中学校源流体験.....5

吉野川源流資源調査に参加して.....6

今年度秋季イベント参加者募集.....7

第5回全国源流シンポジウムのご案内.....8

せせらぎ館が来館者十万人を達成!

満開の桜もお祝い

四月三日に川崎市二ヶ領せせらぎ館の来館者十万人達成を記念して、同館で来館十万人達成式が行われた。同館は平成十一年三月に開館し、五年間で来館者十万人を達成した。桜が咲き誇る中、県立多摩高等学校吹奏楽部の演奏で幕をあげた十万人達成式は田中館長が「十万人を達成しましたので、これからは多摩川の河口から源流までの距離にちなんで十三万八千人を目指します。」と開会の挨拶を行った後、京浜河川事務所の海野所長、宿河原町の戸田町会長、



田中館長から記念品を受け取る君田さん(右)

多摩川源流研究所の中村所長がお祝いの言葉を述べた。

来館十万人を飾ったのは君田みよ子さんで「多摩川の鳥の観察をしています。知らない鳥を見たらせせらぎ館で調べるといいことを繰り返していたら十万人目の来館者となりました。これからも鳥や魚をみて行きたいです。」とこれからも多摩川の自然と共に歩んでゆこうという喜びの声を述べられた。来館十

万人を祝うくす玉は出席者が見守る中二つに割れ、垂れ幕と共に桜香る風にたなびいた。

式典の最後には多摩川エコミュージアム副代表の井田さんが「川崎がせせらぎのように音楽が流れる町へ向けてゆきたい」とお礼のことばを述べた。式典終了後にはさくらクッキーが先着百名の流域市民に無料で配布され、季節を感じさせるおみやげとして好評だった。

多摩川源流再生事業を重点に

運営委員会を開催

平成十六年四月十日、小菅村役場二階会議室で、多摩川源流研究所の運営委員会が開催された。運営委員会には、運営委員十二名と廣瀬村長、降矢教育長、中村所長など小菅村、源流研究所から十名が出席。はじめに今年度から新しく運営委員に就任した写真家の鏑山英次さんが紹介された。

運営委員会では、宮林運営委

員長が「平成十五年度は源流研究所が外に向けて大きく羽ばたいた年でした。今年度東京農大に『食と農の博物館』ができたのでその中で源流に関する企画展をやってもいいのではないかとあいつつ。続いて廣瀬村長が「源流研究所も三年がたつて色々村の中に効果が現れてきている。自然再生は村の大事な事業で、小菅村で何が出来るかを考え多自然型の村づくりを進めたいので皆さんに是非ともご支援を頂きたい」とあいつつした。

佐藤源流交流推進室長がこの

一年間の活動を報告、中村所長が森林再生プロジェクト事業、多摩川源流自然再生事業などの平成十六年度事業計画を提案し、審議の後今年度の計画が確認された。

討論では、山道委員から「事業をジャンル分けし、活動の構造図を作るといい。源流探訪でも『秘境』をもっと特化させて小菅ならではのものをつくってほしい」と提案があり、田中委員からは「歴史探訪などは平日

に女性をターゲットにやるという

い。五十歳以上の女性は平日が家を出やすい」との意見が出された。三谷委員からは「源流ファン倶楽部の応援をしたい。ファン倶楽部の組織化を進め、自主運営に任せていくのが望ましい」と、神谷委員からは「景観という言葉は出ているが、小菅に入った途端に奥多摩とは違う小菅らしい景観があるといい。もっと生活レベルで間伐材を使うといいのではないか。」など活発な意見交換が行われた。

源流まつりにて源流茶会開催

源流研究所は五月四日に行われた「第十八回多摩源流まつり」に「源流茶会」を開催し、野点を行いました。

いくつもの沢の水を飲み比べ、「西沢」の沢の水がとてもおいしかったのでその水を前日に取り貯めて一晩寝かせて使用しました。水がまるやかになり、好評でした。

当日は百七十名のお客様がお茶を楽しみ、狛江市からいらしたお客様は「川辺の雰囲気がよく、お茶をおいしくいただけました。来年も源流祭りに訪れた



好評だった源流茶会(5月4日、小菅川付近)

い。」と語り、春の源流を楽しんでいました。

二〇〇四年度「森林再生プロジェクト」スタート

五月十五日から十六日にかけて、昨年度大きな反響を呼んだ「森林再生プロジェクト」事業（日本財団助成事業）が、今年度もスタートした。第一回「森林再生プロジェクト」事業では、東京農業大学の専門家が作成した森林診断白書を基に地元の北都留森林組合や林業家に指導員をお願いし、緑のボランティア三十九名が協力して間伐作業に取り組んだ。

緑のボランティア多数参加

民有林の再生へ向けて

「森林再生プロジェクト」事業（日本財団助成事業）とは、流域の人工林の再生を目指し、東京農業大学の専門家が作成し



間伐前の森で(5月15日、小菅村内民有林)

た森林診断白書に基づき、流域の緑のボランティアが地元森林組合や林業家の指導により間伐などの作業を行う事業である。本事業は昨年度、小菅村・多摩川源流研究所・北都留森林組合・東京農業大学が協調し、流域の緑のボランティアの二百三十名と連携し人工林再生へ向けて開始された。

ただ木を切るのではない

本年度第一回目となる「森林再生プロジェクト」事業は緑のボランティア二十九名が参加し、初日の五月十五日に東京農業大学造林学研究室の菅原助教から間伐の必要性について講義をして頂いた。その後、昨年十二月にも作業を行った小菅村内の

民有林の間伐作業を行った。二日目の十六日は雨になったため、事故防止を考え村内の林業廃棄物処理施設を見学し、北都留森林組合小菅事業所をお借りし、木工教室を行った。

間伐作業では緑のボランティアが八班に分かれ、各班の指導員からアドバイスを頂き間伐する木の選定を行い伐木した。間伐でよく発生する懸かり木には班員全員が協力しロープなどを使い引き倒した。倒した木は枝を落とし、利用しやすいようにその場で玉切りを行い人力で集材をした。

雨のため急遽行なった木工教室では木の利用方法などのお話や木材を有効利用するために導入されたチップパー等の機械を見学した後に、間伐材を利用したネットプレートやウツギなどを使った昔ながらのおもちの製作を行った。

参加者のアンケートを紹介し
ます。

ヒノキが喜んでいた

昨年十二月に実施した民有林に今回も入り明るい日ざしが林床にさしこんでいて、草木が育っているのを発見した。あの暗かった森に緑が育った。ヒノキが喜んでいた。それを見て心が弾んだ。今回の間伐でさらに林床が広がり、森が育つだろう。

木の暖かさと厳しさ に触れる

とても楽しく健康的で充実していたと思います。木の暖かさと厳しさ、林業について少しでも触れることが出来よかったです。体を鍛えて次回に備えます。

他の森林ボランティア とは異なるおもむき

気力・知力・体力の三つを全て使って、しかも楽しく作業をするというスタンスが好きです。初めての参加者も敷居の高さを感じないような雰囲気があり、他の森林ボランティアとはおもむきの異なるタイプです。一泊とい

うのが良いのかもしれない。

のこぎりにも少し慣れた

二回目の参加でしたが、汗を流して作業をしてとても気持ち良かったです。何本か切るうちにのこぎりにも少し慣れてきたので、天気がよければ、もう少しのこぎりの使い方が上達したのかな？と思いい残念です。

こんなに充実できた のは初めて

今まで、いくつかのボランティアに参加したことはありませんでしたが、こんなに充実できたのは初めてでした。その理由はボランティアの目的・背景・将来性が明確だったからです。



菅原助教の講義風景(5月15日、小菅村役場)

新緑きらめく源流探訪の旅を満喫

五月から六月にかけて春の「源流・大菩薩探訪の旅」と「源流・水干探訪の旅」が行われた。今年度は参加者の声に応え、水干探訪に平日コースを設定した。また、小菅村内のコースを充実させることで大菩薩や水干だけでなく源流域全体の魅力をより多くの人に伝えられるよう工夫を凝らした。読売日本テレビ文化センターなどのタイアップ事業も好評だった。

タイアップ事業も好評

新緑の大菩薩探訪

五月二十九～三十日に行われ



水干に到着(6月5日、水干)

た「源流・大菩薩探訪の旅」は一日目に小菅村の長作地区を見学し、足慣らしをかね松姫峠から鶴寝山を経て戻るハイキングを行いました。短時間ながら新緑の広葉樹林などの風景を見ながら歩きました。

雨が心配された二日目でしたが、夜が明けてみると日差しが厳しいほどの天気となりました。今回は日向沢登山口から登り始め、標高が上がるにつれて変化する新緑に目を奪われているうちにフルコンバを通り、大菩薩峠に到着しました。

大菩薩峠で小休止をした後、熊沢山を経て天狗の頭に登り、昼食を取りました。昼食中に雲が出始め、雨が降ってくる心配がありました。下山途中で雨が降り出すことはありませんで

した。

参加者の皆さんは新緑と山嶺からの風景を楽しみました。

平日コースも好評 水干探訪の旅

今年度は休日コースと平日コースと二回の「源流・水干探訪の旅」を行いました。

六月五～六日の休日コースは一日目に「源流・大菩薩探訪の旅」と同様に長作地区を見学した後、松姫峠から鶴寝山へハイキングを行いました。

二日目は作場平から登り始め笠取小屋を過ぎたあたりから雨となってしまう、残念ながら最初の一滴は見られませんでしたが、しかし、笠取山からの新緑を堪能できました。

同月九～十日の平日コースの一日目はリピーターが多数であったため、奥多摩湖のドラム缶橋を渡り、その後小菅村の下水



ブナの巨木の前で(6月5日、鶴寝山)

処理施設を見学し小菅川沿いを散策しました。

二日目は水干の最初の一滴がゆっくりと垂れており、参加者は手に一滴を受け止めて多摩川の源流を味わいました。

残念ながら今年度は両コースとも笠取山のシャクナゲは盛りを過ぎていましたが、新緑の鮮やかさや標高に沿って姿を変える樹木が印象的でした。

好評！タイアップ事業

今年度も流域の団体とのタイアップ事業を積極的に進めております。

五月十三～十四日には多摩川流域リバーミュージアム検討協議会(TRM検討協議会)の「多摩川の源流と林業」をテーマに行われた研究会に協力し、小菅村内の林業や村の取り組みを知るために村内の林業廃棄物処理施設や北都留森林組合小菅事業所を見学し、間伐材の利用などについて学ばお手伝いをしました。

また、二十二～二十三日には読売日本テレビ文化センターと多摩川に学ぶ会の二団体とタイアップし「源流・水干探訪の旅」を行いました。

残念ながら水干探訪では雨となってしまう。笠取山への登山は中止となってしまいましたが、最初の一滴は見る事が出来ました。

河口から源流までを歩く活動を行う多摩川に学ぶ会の会員は「鮮やかな緑、時には霧と重なり合う原生林の中を、一步一步踏みしめて登った。一滴の水を手で感動すら覚えた。」と感想の中で述べていました。参加者は霧に霞む森の魅力に感動していました。

心も水に洗われて元気になった

昨年6月25日から26日の2日間、川崎市高津区の宮内中学校2年生150名が小菅川上流域での源流体験と塩山市笠取山の水干の「最初の一滴」を訪ねる取り組みを実施した。参加した生徒から源流と出会った驚きや感動、不思議さが生き生きと語られた体験談が寄せられたので、紹介する。

川崎宮内中学校の源流体験談

自然の音が重なり
一つの音楽を奏でる

川崎の車や電車の音ではなく



源流体験を終えた宮内中学生(小菅川上流域)

風の音、水の音、鳥の声など、自然の音をたくさん聞くことができた。源流体験では流れる水の音、岩にあたる水の音、自分たちが水に入っていく時の音、いろいろな水の音が聞けた。水干登山では「ホーホケキョ」というウグイスの声、木の葉がゆれる音、地面を歩く音、すべての音が川崎では聞くことができないう音だったと思う。そしてそのすべての音はすべての音と重なり合って一つの音楽を奏でていた。

泳ぐことがこんなに
楽しいこととは

私は初めて源流体験をやりま

した。水に入った瞬間すごく冷たくて石や底が見えてすごくキレイでした。最後に川を泳いで、深い所では自分の背ぐらいありました。でも泳ぐことがこんなに楽しい事だとは思っていませんでした。でもその逆に危ないこと

もあるということもわかりました。帰るときも川の中に入って、でも一回水の中に入ったからなんとなく濡れても平気だなあと思いました。源流体験をしているんなことがわかりました。またいろいろな体験や自然に触れ合いたいなあと思いました。

心も水に洗われて
元気になった

力強い場面・優しい場面・静かな場面：といくつもの顔を見せてくれた多摩川の源流。どんな場面の水も感動させてくれた。まだ地上に出てきたばかりで、

一生懸命な感じがした。水の中に入る時もすごくドキドキした。すっごく透きとおっていてすっごく流れが速くて水が生きているみたいだった。自分の心も水に洗われて元気になった気がした。

向こう側へ渡るとき
流れに足をとられ

初めはロープを使って下まで降りて、川の所まで行った。おそろおそろ降りながらやっとなに着いて水の中に足を入れた時、冷たくて「うわっっ」って思ったけど入れてるうちにだんだん慣れてきて、気持ち良くて、「足をだしたくない」と感じるようになってきた。向こう側へ渡る時、流れに足をとられて何回もコケて全身ビショビショになったあ・・・(コケるのに慣れると、濡れまくりました)

でも水の音とか、流れとかすごくキレイで気持ちよかったです。途中で飛び込める所があったんで「ラッキー」と思って思いつ

きり「ザバァン」と飛び込みました。

自然を甘くみちゃ
いけないと思った

最初、「源流体験なんて余裕、余裕。俺の敵じゃねえ」と思って源流体験をしていた。その通り最初は楽だった。しかし最後の飛び込みの時、ハブニングが起きた。飛び込んだ瞬間足をつり、そして水の冷たさに息が出来なくなりました。しかし友達に助けってもらい、一命をとりとめた。自然を甘くみちゃいけないと思った

弱くて小さな一滴から
すごく大きな多摩川へ

水干まで山を登りました。とても辛かったしとても疲れしました。私は水干を一秒に一回くらの「ポツポツ」という感じかなーと想像してただけで本当は三秒に一回「ポツッ」と落ちるくらいのスローペースでびっくりしました。こんなに弱くて小さな一滴から、すごく大きな多摩川につながるんだなあ：とすごく不思議だなと思いました。すごく弱くて小さな一滴だけけどその一滴にすごくありがたみを感じました。

吉野川源流資源調査に参加して

(奈良県 川上村)

全国源流ネットワークは吉野川源流資源調査（日本財団助成事業）に取り組んでいるが、平成16年1月24日～26日に実施した源流資源調査に参加した東京農工大学の菅原泉助教授の調査報告書を今回と次号の2回に渡って紹介する。東京農業大学造林学研究室助教 菅原 泉

(1) 酒造り産業と結びついた樽丸生産

川上村は、以前から訪れたいと思っていたので、今回、タイムリグ良く中村所長の調査に同行できたことは幸運であった。川上村は、幾多の研究者が訪れ様々な角度から歴史・文化や産業の学術調査が行われてきた地域である。歴史・文化的なことと



吉野杉の巨木の切り株の上で(1月25日、奈良県川上村)

りわけ有名なことは、後醍醐天皇が吉野に移り南朝を興したことでであろう。また、産業的なこととして江戸時代から地域的な人工林の維持管理技術が確立されてきたことである。その特徴は、大阪商人の資本によって、灘・伊丹地方の酒造り産業と結びついた樽丸生産が主であったことが挙げられる。その背景から一般的な説明として、植栽本数を1ha当り8,000本から10,000本の高密度にし、若齢期の肥大成長を抑えて、さらに間伐を頻繁に行い樹体の成長が衰えない施業をしてきたと云われてきた。このような歴史的事実を一堂に理解できる場所として、川上村の「森と水の源流館」と川上村林業資料館「山幸彦のもくもく館」がある。源流館では、吉野川の流れとともに人々の生活が森林と川の絆で強く結ばれていることが判るように工夫して展示されている。また、もくもく館では、歴史と

文化を基調とした林業の発達史がパノラマ的に配置されているので、短時間の内に「吉野林業の物知り博士」になること請け合いである。

(2) 「歴史の証人」下多古の森

今回の調査に同行して、特記したいことは、「歴史の証人」下多古の森」を調査したことと「トガサワラの原生林」を見たことである。「歴史の証人」はスギとヒノキの人工植栽によるもので、最高の樹齢が約380年である。今回の現地調査では、大きさを実感するために成立木の胸高直径を計測した。その結果、胸高直径が90から125cmまでの範囲にある7本は、樹齢が約280年、121から164cmまでの3本が約380年であることが資料等により確認できた。最も太かった164cmの巨木の立地条件をみたところ、

小尾根に挟まれた小さな凹地にあるため、強風がともに当たらない地形に立っていることと、水分条件が良く、かつ、上方から表層土が集積し易く、栄養分に富んだ地になっていることが特徴的であった。また、ヒノキは、280年生が52本あり、その内最も太いのが95cmであった。直径分布をみると、66から70cmまでが16本と最も多く30%を占めていた。次いで、76から80cmまでの13本で25%を占めていた。スギ、ヒノキのいずれにしても、誇りうる林分である。

(3) 最も重要な人々の意識の伝達

川上村では、その生育地を村有地(約0.4ha)として買い上げ、その雄姿を子孫に残すことにしたのが、平成7年(一九九五)のことである。これには、私も地元の方々の崇高な心意気に少なからず感動した。樹種を問わずに、巨木は存在しているだけでも十分価値がある。しかし、日本で巨木を保存したいと考えられている人々の中に、現存する巨木だけに固執しすぎる懸念を感じる。私は、巨木をいかに子孫へバトンタッチするのが最も重要な問題と考えているが、それは物体としての樹木だけでは



吉野杉胸高直径の測定(1月25日、川上村中奥地区)

ないと考えている。つまり、受け継がせるべきものは、現存するモノだけではなく、ここに至るまで樹体を育んできた自然の環境と人々の意識を伝達することである。物体として限りある寿命が尽きて、人々に連綿と受け継がれる意識＝精神は永遠である。この精神があれば、いつの世でも天然性や植栽木に関わらず数百年以上永らえることも可能となる。

現実的にこれが不可能でないことの1例として南朝の歴史舞台となった川上村では、古の文化を幾世代にも渡って住民が守り育て、現在まで力強く伝承していることから窺える。

参加者募集！平成16年度秋のイベント紹介

ご好評をいただいております「源流・大菩薩探訪の旅」「源流・水干探訪の旅」を秋にも開催いたします。また、今年度も「多摩源流・ソバ作り体験」と「源流・干柿体験」を行います。これらは多摩川源流域の自然や文化などを広く流域の皆様にご紹介いただき、上下流交流を推進することを目的としております。皆様のご参加をお待ちしております。

「源流・大菩薩探訪の旅」

「源流・大菩薩探訪の旅」はこれまであまり知られていない南大菩薩を歩く旅です。登山は



源流・ソバづくり体験(小菅村)

イタヤカエデやコミネカエデ等の広葉樹の紅葉が美しいコースです。峠からは南アルプスや富士山も絶景です。コースは日向沢登山口から登り、大菩薩峠↓熊沢山↓石丸峠↓天狗の頭↓牛の寝↓雄滝上流へと下る七時間ほどの行程です

◎日時／十月二十九日(金) ↓ 三十日(土)

◎集合／JR奥多摩駅午前十時

◎費用／一万三千元(宿泊費・一泊四食付・保険代・温泉代・その他)

◎対象／山歩きに自信のある六十九歳以下の方

◎定員／三十名(先着順)

「源流・水干探訪の旅」

多摩川は塩山市の笠取山にあ

る水干から百三十八キロ旅して東京湾に注ぎます。あなたも多摩川の最初の一滴に触れてみませんか。山梨百名山に指定されている笠取山の頂上から見る紅葉も秀景です。

これまで最初の一滴に出会えなかった方の再挑戦もお待ちしております。

コースは歩きやすい整備された登山道で、往復六時間の行程です。

◎日時／十月二十九日(金) ↓ 三十日(土)

◎集合／JR奥多摩駅午前十時

◎費用／一万三千元(宿泊費・一泊四食付・保険代・温泉代・その他)

◎対象／山歩きに自信のある六十九歳以下の方

◎定員／三十名(先着順)

「源流・干柿体験ツアー」

源流域では高齢化が進み柿の実がなくても大きな柿の木から柿の実をもぎ採るのは大変な労働でただ落ちるに任せる家庭も多くなっています。そこで、軒先に柿をつるす山村の景観維持と源流域ならではの食文化の継承を目的に干柿体験ツアーを行います。

このツアーでは竹竿で柿をもぎ採り、その柿を干す過程まで体験していただきます。後日、完成した干柿を発送いたします。「自分で作った物を食べたい」など、多くの方々のご参加をお待ちしております。

◎日時／十一月二十日(土) ↓ 二十一日(日)

◎集合／JR奥多摩駅午前十時

◎費用／一万三千元(宿泊費・一泊四食付・保険代・温泉代・その他)

◎対象／自分で干柿を作ってみたい方

◎定員／二十五名(先着順)

「多摩源流ソバ作り体験」

ソバは夏と秋の二回収穫することが出来ます。今回はその内の秋ソバ作りを作付けから始め、刈取り・脱穀・製粉・ソバ打ちの各工程を日帰り二回と一泊一回の計三回で体験していただきます。源流域の貴重な食料であったソバをあなたの手で作ってみませんか。

「作付けから行うことでただのソバ打ちとは違い、ソバという作物の奥深さも学ぶことが出来る。」など、打つだけでは分からないソバの魅力をぜひ、あなたも体験してください。

◎日時／八月十二日(木)作付け、十月二十日(木)刈取り、十月十三日(金)～十三日(土)

◎集合／JR奥多摩駅午前十時

◎費用／一万三千元(全日程・宿泊費・種代・管理費・保険代・温泉代・その他)

◎対象／ソバを作る意欲があり農作業が出来る方

◎定員／十五名(先着順)

お問い合わせ・お申し込みは
小菅村役場(源流振興課)
☎0428・87・0111
多摩川源流研究所
☎0428・87・7055

第5回全国源流シンポジウムのご案内

(1) 開催の目的

全国源流シンポジウムの第5回大会を記念して首都東京で開催し、都市生活者に源流域の自然、歴史、文化、国土保全の役割等を広く周知、啓発すると共に、「源流は国民共有の財産である」との理解と共感を広め、より広範な源流ネットワークを構築し、源流域の環境保全や地域づくりへ貢献することを目的とする。

(2) 全国源流シンポジウムの内容 参加無料

■あいさつ 進士五十八東京農業大学学長、来賓

■源流からのメッセージ 源流・廣瀬文夫小菅村村長

■記念講演 「日本人の心の源流求めて」
作家 椎名 誠

■テーマ 「源流の魅力と可能性を語る」

■基調提案 高橋 裕 東京大学名誉教授・新河相学堂長

■パネラー 箕輪光博 東京農業大学教授
洪沢寿一 樹木・環境ネットワーク協会専務
河村文夫 源流・奥多摩町長
阿部孝夫 河口・川崎市市長
恵小百合 荒川流域ネットワーク代表
中村文明 全国源流ネットワーク代表

■コーディネーター 高橋 裕

■日 時 2004年10月2日(土)～3日(日)

■場 所 東京農業大学・百周年記念講堂(東京都世田谷区)
小田急線「経堂」下車15分
東急田園都市線「用賀」下車20分

■二 日 目 都市河川のルーツを辿る旅など体験型のイベント

■関連行事 源流物産展・源流のコーヒー無料サービス

■主 催 全国源流シンポジウム実行委員会 実行委員長 高橋 裕

■協 力 多摩川源流協議会・多摩川流域ネットワーク・
荒川流域ネットワーク

■協 賛 東京農業大学

■後 援 国土交通省、環境省、林野庁、川崎市、世田谷区(予定)

■連絡先 全国源流ネットワーク 0428-87-7055 中村文明
NPO法人全国水環境交流会 03-3408-2466 山道省三



椎名 誠氏